の寺全

水上勉

文藝春秋新社

雁の寺 全

昭和三十九年四月十日発行

定価 六百円

著者 水上勉 ©

発行者 上林吾郎

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本
製函 加藤製函

第一部　雁の寺……五
第二部　雁の村……一〇三
第三部　雁の森……一六九
第四部　雁の死……二五一

题字　佐佐木茂索

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

雁の寺

第一部

雁の寺

1

鳥獣の画を描いて、京都画壇に名をはせた岸本南嶽が、丸太町東洞院の角にあった黒板塀にかこまれた平べったい屋敷の奥の部屋で死んだのは昭和八年の秋である。

老齢に加うるに持病のぜんそくがひどかったせいもあって、蟷螂(かまきり)のように痩せた南嶽の晩年は意志だけが生きのこっているように思えた。死なはる時はまるで虫喰いの枯木が倒れたようどした、と居合わせた弟子たちが口ぐちにいったほどだから、精力家としても知られ、女あそびも人一倍だった生前を知っているものにとっては、こと更、南嶽の死際がそのように思われたのかも知れない。彼は一昼夜、大いびきをかいて寝ていたが、最後は、やはり咽喉をならし、苦しみもがいて死んだ。南嶽は六十八であった。

岸本南嶽が死んだ日の前日、正確にいうと十月十九日のことであった。夫人の秀子がちょっと外に出た留守の間に、偶然ではあったろうが、見舞かたがた立ち寄ったといって、衣笠山麓にある孤峯庵の住職、北見慈海が訪ねてきた。和尚は首に白絹布の護襟(ごきん)をまき、黒の被布をきて、どこかの回向の帰りとみえ、裾から紫衣の襞をのぞかせていた。

「どうや、どんなあんばいか」
慈海和尚は、玄関に出た顔見知りの女中にそんな言葉をあびせながら、つかつかと入ってきた。と、そのとき、うしろに、まだ十二、三歳としか思えない背のひくい小坊主が立っていた。この小坊主も和尚の後ろを上ってくる。
岸本家は、孤峯庵の檀家であった。名誉総代にもなっていたから、和尚がこうして奥の間にさっさと通っても不思議でもないのだが、折から、枕元に坐っていた弟子たちの中で、病人の口もとを水綿でしめらせていた兄弟子の笹井南窓が、ちょっと気に病んだ。縁起でもないと思ったのである。師匠はいま虫の息で医者からも見放されている。そこへ、菩提寺の和尚の来訪だった。南窓は、皆にしぶい顔をしてみせた。女中が、茶菓をとりに廊下へ下ってゆくと、弟子たちの顔色をまるで無視したように、慈海は風をたてて枕元に歩みよった。臥ている南嶽の顔をさしのぞいて、
「どうや、どんなあんばいか」
と和尚はいった。声がたかかったので、ひくい天井にまでそれはひびき、襟もとまですっぽり絹蒲団をかぶって朽木のようにねている南嶽の耳を打った。とじていた瞼を南嶽はうっすらと半びらきにあけると、
「和尚さんか」
と、苦しそうな声をとぎれとぎれにだした。
これは、わきにいた弟子たちを驚かせた。朝から南窓がいくら師匠の名をよんでみても南嶽は押しだまっていた。それなのに、いま乾いた口をわずかにひらいて南嶽はかすれ声でいったのだ。
「来てくれると思うた」
「いやな役目だな」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

和尚は、ずんぐりした肩を落して南嶽の顔をさしのぞいてから、横柄な物言いでいった。

「わしは、あんただけは迎えにきたくなかった」

そういうと、広い十畳間に南窓と三人の弟子が坐っているのを、和尚は、はじめてみるような眼つきで見廻した。不意にケラケラ笑いだした。笑い終ると、先程から縁先に立って、じっと庭の色づいた蔦のからみついている石燈籠に見入っている小坊主をよんだ。

「おいおい、慈念」

小坊主は、ぴくっと肩をうごかした。首だけこっちへ廻して部屋をみている。剃っているので、頭の鉢の大きなのがへんに目立つ子供である。額が前にとび出ていた。ひどい奥眼なので顔がせまくみえる。

「こっちへおいで」

慈海和尚は手招きした。小坊主は畳のへりをよけて静かに歩きだした。擦るような歩き方である。

「慈念いうてね。昨日、得度式がすんだ。庭もきれいに掃除してくれる。ようなったら、いっぺん寺へあそびにきてもらわねばならんの」

立ち寄った理由は、これであったか、侍者を育てることになったあいさつのようなものだったか。南窓はつるつるに剃った大きな頭の小坊主の横顔をじいっと睨めていた。ずいぶん陰気な感じのする小僧を入れたものだなと思った。禅寺で小僧が得度式をあげた場合、これを檀家総代に披露目するのはしきたりだったのである。

和尚はやがて枕もとから踵をかえして縁の方に歩きだした。と、このとき、南嶽がまたかすれ声をだしていった。

「和尚さん、さとを頼んますよ。あれは、孤峯さんの娘や」

そういったかと思うと、瞼を閉じた。声をだしたのがわるかったとみえて、南嶽ははげしく咳き込みはじめ

た。南窓がにじりよって、湿綿を口に何どもあてた。

和尚は、その有様をふりかえってみていた。大きく会釈しながら見下ろしていたが、そのとき南嶽の顔はもはや草色であった。

「大事にな」

いい置いて、ほんの四、五分間のやりとりであった。慈海は得度式がすんだばかりの小坊主の頭を一つ撫でると、小股歩きにせかせかと岸本家を退去していった。

翌日まで、南嶽はひと言も口をひらかなかった。大いびきをかいて苦しそうに咽喉をならしていたと思うと、それが急にとまって息をじなかったりした。息をひきとるときに、口をかすかにあけた。何かいったようなので、弟子たちはのぞきこんで耳をかたむけたが、「さと」ときこえたようであった。

弟子たちは枕元の夫人秀子の方をみた。秀子は袂を顔に押しあてて、むせび泣きはじめていた。きこえないらしかった。

南嶽が死ぬ間際にたのんだ、さとというのは桐原里子のことで、南嶽が上京区の出町の花屋の二階に囲っていた女である。木屋町の小料理屋につとめていたのを、南嶽がひっこぬいて晩年入りびたりになった相手であるが、この女のことは弟子たちも、慈海和尚も会って知っていた。三十二だが、小柄で、ぽちゃっとしており、胴のくびれた男好きのするタイプでかなり美貌であった。なぜ、南嶽がこの里子のことを慈海に頼んだか。考えてみると理由がないとはいえない。

健康であったころの岸本南嶽は、遠くは中国にも、欧州にも旅をしたけれど、念の入った大作となると、いつも孤峯庵の書院を借りて仕事をする習慣だった。衣笠山周辺から落葉樹林のある寺のあたりが好きだったらしく、ここが、晩年のアトリエになっていた。十年ほど前のことだが、南嶽はひと夏じゅう仕事もしないで孤

峯庵の書院で暮したことがある。そのとき、つれてきていたのが里子であった。

「これはな、わしの描いた雁や」

里子をつれて、孤峯庵の庫裡の杉戸から本堂に至る廊下、それから、下間（げかん）、内陣（ないじん）、上間（じょうかん）と、四枚襖のどれにも描かれてある雁の絵をみせて歩いた。

襖は金粉がちりばめてあった。根元の大きな古松が、四枚つづきで大きく枝をはっていた。針のような葉が一本一本克明に描かれていた。雁のむれは、その枝にとまったり、羽ばたいたりして宿っていた。とび立ちかけて白い腹を夕空に輝かせている一羽もいるかと思えば、松の幹の瘤の一部のように動かずにすくんでいる一羽もいた。子の雁もいた。口をあけて餌を母親からもらっている雁もいた。それらの幾羽とも知れない雁は、墨一色で描かれていたが、一羽とて同じ雁ではなかった。画家が情熱をこめて、一羽一羽に念を入れ描いていった筆の音がきこえるようであった。雁は生きているかにみえた。

これは南嶽がその年のまだ二年ほど前の春、性根かたむけて描いたものであった。本人が自慢しても、はばからないほど卓（すぐ）れた絵である。

「わしが死んだらの、ここは雁の寺や、洛西に一つ名所がふえる」

酒気をおびていたので南嶽は、里子の首すじに手をやりながら微笑していった。

「啼き声がきこえるようやわね」

里子は本堂のうす暗い光りの中で恍惚とつぶやいた。南嶽は微笑しながら、そんな里子の首すじをいつまでも弄んでいた。

死んだ南嶽が、慈海和尚に里子を託したのは、この夏のことが忘れられなかったからであろうか。

事実、慈海も書院でよく三人で酒を呑んだものである。慈海は南嶽より十歳も若かったが、南嶽に負けない

ほど精悍な軀と顔をしていた。里子とも性が合った。
「和尚さん、耳の穴の毛ェだけはぬいとくれやすな」
里子が酔いのまわった眼をほそめてそういうと、慈海は笑って二人をみつめている。その眼には好色な光りが宿っていた。慈海には妻はなかった。よく里子は南嶽に、
「和尚さんの眼ェがこわい」
といった。慈海が自分を好いていることを知っていたのだ。
慈海も南嶽も、好みが一致していた。女も酒もすべて話が合った。南嶽はいつまでも慈海が妻帯しないことに不満らしかった。孤峯庵は燈全寺派の別格地だといっても、本山塔頭の寺院でさえ、すでに匿女は大びらであった。庫裡の奥に、どの寺も女をかくしていた。好色でもある和尚が独身を守る理由がないと面とむかって南嶽はいったものだ。しかし、慈海はへらへら笑って相手にしない。しつっこく南嶽がいうと和尚はこういった。
「髪を断ずるは愛根を断ずるなり、禅家の剃髪の趣意じゃがの」

初七日がきたとき、桐原里子は喪服を着て、細い白い腕に褐色の瑪瑙の数珠をはめて孤峯庵の門をくぐった。この日は曇り空で、風があった。小松の茂った衣笠山は、盆を伏せたように煙っていた。なだらかな裾一円は、すっかり葉の疎らになった落葉樹林にかわっていたが、山の赤い地肌のすけてみえるあたりに、紅葉した楓がいくつもはさまれて映えている。
孤峯庵には、山門のわきに鉄鎖のついた耳門があった。里子が草履の音をさせて入ってくると、この鉄鎖はキリキリと音をたててあたりの静寂を破った。応対に出たのは、里子には初対面の慈念である。鉢頭の大きな、

眼のひっこんだ小坊主は、少し長目の青無地の袷をきて板の間に膝をついていた。それが庫裡の煤けた柱を背にしていやに大人っぽくみえる。里子はちょっと途惑った。

「出町がきたと和尚さんにいうとくれやす」

里子は、上りはなの踏石に立って、そういった。

「はい」

慈念はすぐ隠寮の方に下ったが、まもなく、奥から廊下を歩く早足の音がしだして、白衣の袷に角帯をしめた慈海が出てきた。

「あがんなはれ、あがんなはれ」

里子は、なつかしそうに和尚をみた。むっちりとした里子の軀はいつものとおりしゃきしゃきしていたが、顔だけは思いなしか心もち蒼く澄んでみえた。そんな里子をみて、慈海和尚は喜悦の声をあげた。和尚は里子を書院に通した。そこは、里子にも思い出の部屋であった。南嶽の葬式は、すでにここですんでいた。築山と池のみえる静かな部屋である。里子は掌を畳について瞼をうるませていった。

「和尚さん、お久しぶりどす」

里子は、南嶽の葬式に列席するわけにはゆかなかった。出町の花屋の二階でその死を知り、葬式の日取りも知ったが、一人で故人を偲んでいたという意味のことを語った。

「早よおまいりしたい。和尚さん、あの人の絵をみせとくれやす」

里子はあまえるようにいい足した。

本堂に案内され、やがて里子は打敷のかかった台の上に、まだ新仏の位牌が特別に飾られてあるのをみて息をつめていた。

秀嶽院南燈一見居士。

慈海がつくった院号の戒名であった。岸本南嶽はいま、一尺たらずの短冊型の板にその軀をちぢこめて立っていた。

里子は香を焚いた。十畳ほどの内陣は香煙で白くなり、煙が畳の上にたゆたいはじめると、南嶽の描いた襖の雁が、霧の中で動きはじめるように思われた。美しい雁であった。里子はふと、南嶽が成仏しただろうと思った。

下間の襖の中央部に、白い腹毛をふくらませた二羽の雁が目についた。その一羽は松の窪みにちぢこまって一羽の雁の脇下を嘴でくすぐっていた。里子はいつまでもその襖絵をみていた。と、このとき、慈海がうしろからいった。

「さ、あっちへゆこ、いっぱい薬酒をさしあげよう」

慈海はうきうきしていた。里子は隠寮の六畳にはじめて通った。そこは慈海の部屋であった。膝をついて、座蒲団を出してくれる小坊主を顎でしゃくった慈海は、里子にいった。

「これがの、わしの女房がわりや、慈念いうてのう、ついこのあいだ得度したばかりじゃがの」

慈念はぺこんと頭を下げ、ひっこんだ奥眼をきらりと光らせて、里子をみていた。やがて、はにかんだように、さっと顔を伏せ、足早に去っていった。

「玄関ではじめてみたとき、びっくりしたわ。妙な子供さんや思うて……いくつ？」

「十三や」

「へーえ、学校は？」

「大徳寺の中学校へいっとる」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com